

 ルールの外にある尊敬

ジャッジに不満があった。大事な局面での判定だった。心中は穏やかではなかった。だが、指導者は試合後、審判のもとへ歩み寄り、こう言った。『今日は難しいゲームでしたね。ありがとうございました。』

それを見ていた選手たちの表情が、ほんの少し変わったように見えた。

審判への対応は、『コンプライアンス』ならば、抗議の仕方や発言の範囲が焦点になる。

だが『インテグリティ』は、敬意そのものの有無を問う。結果への不満と、人への敬意は両立できる。

——それを、誰よりも指導者が示すべきだ。判定は変えられなくても、態度は選べる。

試合が終わっても、指導は終わらない。そこで伝えられることは、技術よりも深く、ずっと長く残る。

『コンプライアンスは最低限。インテグリティは“信頼”をつくる最高基準。』

— どちらも大切だが、どちらが先かを見誤ってはいけない。

 コンプライアンス vs インテグリティ

— 指導現場で問われる「ふたつの軸」 —

比較項目	コンプライアンス (Compliance)	インテグリティ (Integrity)
意味	法令や規則、ルールを守る	誠実さ、倫理、内面の正しさに基づく行動
判断軸	「ルールに違反しているか」	「これは正しいか、誠実か」
行動の動機	外からの強制・監視	内からの自律・信念
指導場面の例	試合中に抗議をしないよう 選手に指導する (規則遵守)	審判に対して、納得いかなくても敬意ある態度を貫く (人としての姿勢)
育成年代での姿勢	相手の弱点をつくのは ルール上 OK	子どもが「どう成長するか」を軸に指導内容を考える
試合中の実例	競技規則を守る	勝敗が決まっても最後まで全力を尽くす姿勢を 選手に伝える
問われるとき	違反や問題が発生した時点	誰にも見られていないとき・勝っているときほど問われる
結果	違反しない = 罰せられない	信頼される = 組織やチームが育つ